

拝啓 今年も早や7月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。わが家の玄関わきの軒下には、今は夕顔とゴーヤを植えています。また、朝顔を鉢植えで5つ育てています。つるで伸びる花は、手間がかかりますが、毎朝の少しの時間の世話を楽しく感じています。

今回は新渡戸稲造先生の『人生雑感』の4回目「悲哀の使命」という講演録から引用です。(4)のところに次のようにあります。

「悲哀には悲哀の使命があるに違いない。天は人の泣き顔を見るのを嫌うならば、この悲哀には何か意味が潜んでいるはずである。悲哀の意味を知らぬ人はまだ人生の真相を解していない。」

新渡戸先生が経験された悲哀は、札幌農学校3年生の時、札幌から盛岡を経て、東京に行った時、盛岡で10年ぶりに母に会えるのを楽しみにして帰ったら、お母さんは、その2日前に亡くなってお葬式が終わったばかりでした。新渡戸先生は、その時気絶をされたそうです。また、メアリー夫人との間に、遠益と名付けた男の子が生まれましたが、生後8日にしてなくなりました。こういう経験をされて、新渡戸先生のイエス様のような人柄が出来上がりました。

7月11日(火)午後、佐生健光さんを病院にお見舞いに行きました。

7月12日は、大学時代のゼミの同窓会があり、終わったあと数人で相田みつを美術館に久しぶりに行きました。しばらくぶりでしたので、心を打つ言葉が多くありました。相田みつを美術館は、まだ行ったことのない方がおられれば、有楽町の東京フォーラムの地下1階にあります。

7月18日朝、日野原重明先生が亡くなられました。翌日、用事で石館悦子さんに電話した際、石館守三先生の御命日も7月18日で、天国でお迎えになっておられるでしょう、とのことでした。石館先生の方が、10歳年上だそうです。

7月21-22日と一泊で、谷川岳の麓のハイキングと白毛門(1720m)の登山に出かけました。麓の散策は、パーキンソン氏病を長く闘病している村野憲政さんと歩きました。白毛門は、本誌読者の佐藤昭夫さんと二人で登りました。谷川岳、特に一の倉沢の全貌を見下ろすことができ、素晴らしい展望でした。ただし、朝5時20分出発、3時20分下山、登り1000m、同じ道の下り1000m、10時間の登山というのは、75歳の老人には、ほとんど限界的な登山で、相当くたびれました。しかし、力を使い果たす直前までの登山もまた楽しからずや、という満足感もありました。

今年の夏は、暑さが厳しいそうですので、どうぞお身体ご自愛のうえ、お過ごしください。

敬具

平成29年7月24日

山口周三

エンカウターの読者各位